

2018. 11. 11. 聖霊降臨節26主日礼拝式説教

ダビデ王物語講解説教

聖書：サムエル記下11章1-27節

『罪人ダビデ』

イスラエルは全軍を挙げてアンモンとの戦争を続けていました。ダビデは一人エルサレムにとどまっていた。どういう理由で戦いの陣頭にいなかったのか、わかりませんが、王宮に一人とどまっていた。

午睡から覚めて、王宮の屋上を散歩していた時、ダビデは美しい一人の女性が沐浴している姿を目にしました。王宮は見晴らしのいい、エルサレムの町を一望できるような場所にあり、たまたま一人の女性がダビデの目に映りました。ダビデは遣いの者をやって彼女の身元を知ったうえで、彼女を自分のところに呼び寄せました。つまり彼女が人妻であることも、エリアムの娘のバト・シェバであることも知ったうえで、呼び寄せ、床を共にしたのです。ところが彼女は結果妊娠する。その事実を彼女はダビデに知らせてきました。ダビデは軍の司令官ヨアブに伝令を伝え、バト・シェバの夫ウリヤを呼び寄せます。ダビデはウリヤに戦況を聞いたうえで、家に帰って休めと言います。そのことで、妊娠はウリヤとの性行為によるものだったのです。しかしウリヤはダビデの命令には従いませんでした。多くの兵士たちが戦争の前線で戦っているときに、自分だけが家に帰って休息するわけにはいかない、というのがその理由でした。また当時の兵士の倫理として、戦争の間は女性に近づかない、ということもあったであらうでしょう。ウリヤはすぐれた兵士だったのです。

自分の思い通りにならなかったダビデはさらに考えをエスカレートさせて、ウリヤを激戦の地に送り込み、彼をそこに残し、戦死させることにし、ヨアブに書状をしたため、よりによってそれをウリヤに持たせ、伝令を送ります。ヨアブはそれを実行し、ウリヤは戦場で死ぬのです。ダビデはウリヤ戦死の報を受けると、平然と戦争ではあることだと言っただけ、さらに奮戦せよ、と伝えるのです。バト・シェバは夫ウリヤの死を知り、悲しみの中で嘆きました。一方ダビデは喪が明けると、バト・シェバを王宮に引き取り、何人目かの妻にするのです。

すさまじい話です。よくまあ、聖書の中に、こんな話が出てくるわ、というような話です。驚きです。ダビデはここで、姦淫、不倫の罪と、殺人の罪を犯していく。一つの罪を覆い隠そうとして、また新たな罪を、それもさらに重い罪を犯していく。

しかも、罪を重ねた後で、平然とバト・シェバを妻に迎える。わたしたちはこのダビデの姿に驚くのです。あの神の前で謙遜謙虚だった少年ダビデの姿はどこにいったのか。王になってからも、神の箱の前で跳ね踊る、み言葉を心から重んじるダビデはどこへいったのか。ここには、人として、傲慢極まりないダビデがいるのです。まるで別人物のようだ、という人もいます。それほどに信じられないということなのでしょう。だが、王の物語でこれほどの汚点となる出来事が描かれているとすれば、それは最も作為から遠い、事実以外の何ものでもない、と考えるべきです。同じようにダビデのことを記した歴代誌では、この部分はカットされています。それはすなわち、イスラエルの誇るべき王、ダビデにふさわしくないと判断したからなのでしょう。とすればわれわれが驚くのは、一つにはダビデの罪の大きさであり、もう一つは、その罪を余すところなく書き留め記録するサムエル記の著者の姿勢にあります。イスラエルの人々もこのダビデの罪から目をそらさず、サムエル記を途中で編集し直すことでもできたであろうに、このままで継承してきた。

人間ということを考えるときに、罪、ということは避けて通れない。それが聖書には根本のところに貫通しています。どんな人も、罪ぬきに、その人を見るということとはできない、ということです。ダビデのような人がなぜ罪を犯すのか、というのはその人の人間性に対する素朴な共感ではあるのですが、人間というものを存在全体で捉えようとするなら、どんな人も罪を深刻に抱え込んでいる。抱え込んでいる、というよりは根っこのところに罪があるというべきか。だが問題は、人間はその罪を自覚しているか、ということです。

古代の王さまは法律の外にいた存在でした。自分自身が法律という存在でもあり、何をして結局は許される。だがダビデは一人のイスラエルの民として、十戒のもとにあることを自覚している人でした。ダビデのしたことは、十戒のうち、六戒、七戒、八戒、十戒に違反する行為でした。殺してはならない、姦淫してはならない、盗んではならない、隣人の家を欲してはならない。これらに違反していることはユダヤ人であるならば誰でも知っているこ

とでした。知っていて、ウリヤに謝罪するどころか、戦場での半ば合法的な殺人行為という行動に出たダビデは、自分には責任が及ばないような形で、事を進めたのです。ここにあるのは、たとえ律法に違反したとしても、誰にも見られなければ、べつにそれでいいじゃないか、という態度です。ヨアブは自分の忠実な部下だから安心だ。だから、この件はこれで落ち着だ、とダビデは思ったのでしょうか。ここには罪の自覚はない。まったくない。ダビデの罪の問題は、続く12章で深く取り上げられるので、そこでも考えますが、今この11章を読む限り、ダビデに罪の自覚はない。

ダビデのような人がなぜ罪の自覚を持つことができなかつたのか、不思議に思う人も多いでしょう。あれほど信仰に生きようとしたダビデ。その彼がどうして罪の自覚を持つことができなかつたのか。

例えば、ここでのダビデのように、姦淫だとか、殺人、というような明らかな罪の場合でも、人間は心の奥底で、罪を認めない、という態度をとることができるのです。実際テレビや新聞を読むと、そういう事例に事欠かない。しかしそうした犯罪的な要素がない場合、聖書のみ言葉を自分が何度も何度も聞きながら、それを実行しないどころか、何となく自分の意のままに生活しているということ、自分のそういう在り方そのものを自分の罪として本当に自覚しているかどうか。頭ではよくないとか、まずいなと思っていても、根本改めない。誰も見ていないから、誰も自分のこの姿を見ていないから、まあいいか、とどこかで思っているのではないか。

罪の自覚というものが、自分の中の倫理観のようなものであれば、自分の判断で、これはいいこと、これは悪いこと、これは罪、というふうには自覚していくということになります。その場合、人間は当然自分の都合に合わせて判断します。殺人だって自分の都合に合わせて、これは仕方なかった、というぐあいに判断するかもしれない。聖書の言葉に聞き従うなんて、誰だって無理だよ、というぐあいに自分の都合に合わせて判断する。罪の自覚とはそういうことではない。

それはルターが言うように神の意志の前に一人の人間として立つことなしには明らかにはならないことなのです。自分の判断基準ではなく、神さまの意志の前に立って、その意思の前で責任ある自分を知る、そして大事なものは、その神の前に立つことが自分の本当の現実なのだということを知ることです。そして神の前で、神に逆らって存在している自分の存在を知ること、それが罪の自覚なのです。

神の意志とは、神を全力で愛すること、隣人を自分のように愛する、愛せよ、と命ずる意思のことです。その神の意志の前で、自分は神と人とを愛しえない自己中心的な、利己的な存在だということを知ること、その自分という存在そのものが罪であることを知ること、罪の自覚とは、そのことです。

聖書には律法を守ることが大事なこととして出てきます。しかし律法を守っていれば罪を犯していないのか、キリストはそのことを問いかけておられた。どんなに律法を違反していなくても、それを行っている自分の根本に、自分中心で、神を全力で愛するということから反対の方向に向かっていく自分があるなら、善意の行動も罪のあらわれとなることがあります。行動として悪いことをしていなくても、自己中心の存在が罪を重ねていくということもあります。強盗に襲われた人を助けなかった人たちは、確かに助けられないことで律法に違反したわけではないけれど、その自己中心的な在り方は罪人のどうしようもない姿です。

ダビデがしたことは言うまでもなく犯罪でしょう。しかしダビデはこの罪を自覚していない。逆にうまくすり抜けた、と思っているかもしれない。彼が罪を自覚するには、生きて働く神に出会う以外にはない。神の前での自分に出会う以外にはない。それは、このわたしに語りかけてくる神の言葉、イエス・キリストの言葉に出会う他ない。しかもその神の言葉のまえて、応答するわたしとして、責任あるわたしとして、出会う以外には罪の自覚ということを起こってこない。そしてまた、神の前に立った罪の自覚ということの中でしか、神はこの罪人をどう救おうとされているのか、聞くことはできない。ダビデの存在を見つめながら、わたしも神の御前に、神の意志の前に立ちたいと思います。

D a t a : 聖霊降臨節第26主日礼拝式

讃美 : 前377、後402

新生教会礼拝堂